

《二重体》、そして天使との組み討ちについて

鷹見明彦

《二重体》(1999)という作品は、作者の序文にもあるように「知覚の実験室」展(1999 佐倉市立美術館)で発表された映像作品である。私も観たのはその際の一度だけで記憶も曖昧になっているが、展示室の出口の通路のように細長いスペースの壁に映写されていた。二人の人物(富田と友人の辻耕)が、延々と会話する様子がつづくのだが、二人のあいだには、ノートの綴じ込みのような陰翳をもつ境界線があって、それぞれが左右のページのなかで語っているようなヴィジュアルが特色となっていた。フィルムの継ぎ目の転換に伴うようにして、セピアやブルー・グレイのモノクロームが微妙に変化していくのだった。

会話の中身は、二人が中国・福建省沿岸のある町で過ごしたときのことを語りあったものだが、同じ体験をめぐる認識や記憶の重なりとズレが、話し合うことによって近づいたり離れたりするといったコミュニケーションのあり様が、その一冊のノートの左右に分かれた映像のイメージにシンクロする効果となって現れていた。

この作品に先行しては、《引越しました(「我我の家郷迄来てみることができますか」)》(1999)、《投宿中》(同)など、同じ中国の旅をモチーフにして、異郷での体験を直接自分を訪ねてくる他者とのコミュニケーションの媒体とするような試みがあった。それに対して《二重体》では、映像やドキュメンタリー証言といった形式を借りて、コミュニケーションに潜む軋みへの異なるアプローチによる対象化の作業が行われたといえる。

作者は、《二重体》を制作するきっかけとして、シルクロードの砂漠を旅したときにバスに揺られながら夢現の状態であらゆるヴィジョンのことを明かしている。二人の人間がひとつのノートに自分のことを記そうと争うが、やがてどうにかそれぞれに書き記しはじめるという光景……。そのヴィジョンは、どこか『創世記』のヤコブと天使の組み討ちの話を憶い出させる。荒野の河の岸辺で、不意にはじまっ

た取っ組み合いは夜通しつづくが、相手は名も明かさずに夜明けを懼れて消えてしまう。多くの神話や伝承のなかに、時として魔的な様相をともなっけてくり返し現れる〈分身の物語〉は、ユングの言うように人格のうちに影として潜勢するもうひとりの自己のエロスがペルソナと相争って葛藤する心的状態の象徴であり、その分裂の止揚と統合のプロセスこそが真のセルフ（自己）を再生する道であり、創造的な生への扉なのだ。

《二重体》もそうだが、富田は自分がみた夢のヴィジョンや他者の夢に現れた共通のヴィジョンを糸口に作品を制作してきた。《沙子泉》（2000）は、夢でみた砂漠の泉と同様の夢をみたという友人に、そのヴィジョンを絵に描いてもらうこととそのヴィジョンをめぐる会話から作られていた。砂漠に湧く泉のほとりに人影があつて、水を汲もうとしている一。《泉の話》（2001 横浜トリエンナーレ）では、そのヴィジョンを呼び水に、地下水と記憶のメタファーを基軸として、作者が生まれ育った相模原の地下水によって形成された地形と土地をめぐる伝承を繋いで、水に関わる昔話と地元の人々へのインタビューの採集、そして自分の出た小学校の生徒たちとのワークショップなどの総体が多声に交響する作品が展開された。

個人の無意識（夢）と集合的な無意識との共振は、芸術の靈源そして可能性としてもっとも魅惑的な導線といえるが、作者はそれがたやすく個的な創造に転化されてしまうことをデリケートに回避しながら、そこに現れる他者（のなかの自分や自己のなかの他者）との交感に複数の声を聴き分けていく。（それが何事かを知らない者の眼には、砂漠で泉の水を汲んで砂漠に撒くように映るその諸行は、無為の行にも見えるだろうが）。そうした過程自体を制作のプロセスとして、自分のなかに、他者のなかに、世界自身のなかに本来網の目のように流れつづけているはずの共同の水脈をダウジングし、分化し対立を深めるかに映る世界の地表へ、その湧水を汲み上げようとする。富田が、その昔大陸のすべての土地に広がっていた〈うたの径〉を巡り生きたというドリーム・タイムを伝えるオーストラリア先住民のアボリジニやブッシュマンの伝承に強い共感を示す所以でもある。

「・・・気づきといえば、あれから時間が経って改めて《二重体》を編集していて思いました。ひとつの椅子にぼくが座ってしまうと、もう誰も同時にそこに座れないのが現実だけれど、そうではなくて同時に複数の存在がありうるような未知の場所を志向して、あのイメージと作品の追求があったのだな、と」（作者からのメールより）

「そうだね。でもそれはほんとうに未知の場所なのか・・・。自衛隊が砂漠の町に派兵されて間もなく、僕は、自分の前で絶望して泣く人に会ったんだ。その理由は、戦争とは関係ないが、涙は泉のようにあふれてとまることがなかった。TVに映るテロで家族や知人を亡くした異教の国の女たちの号泣と同じように」

「黙って嘆きを聴いて、涙をぬぐってあげるしか出来ることはなかったが、そのあとで僕は言ったんだ。「諦めきれないことも諦めなければならぬからこそ人間なんだ。誰かを喪えばあなたが悲しいように、あなたを喪えば悲しむ誰かがたしかにいることは、ここに留めるべきことだ、と」

「『陽のもとに新しきものなし』（『伝導の書』）とは、人はあらかじめ必要なことは知っているということ。ただ、時としてその良心の声を自分で聴くのが難しくなってしまうときがある。カトリックであるその人の悲しみに膨らんだ胸に掌をおいて、僕はそう言った。だから僕はあなたの代わりに、この胸の内にある声を語るのだと。（あなたは、僕をそのようにことばを生きる友と知っていて、会いに来てくれたのだから・・・）」

2004年3月

たかみ・あきひこ（美術評論家）